）ＰＭＤの栄養改善に於ける一考察

国立療養所南九州病院
山口　フサ子　　平田　理恵子
村岡　恵美子　　加治木　代理子
福元　信子　　吉松　キヌエ
乗松　克政

〔はじめに〕

当ＰＭＤ病棟はやせの改善の為に食餌とおやつの関係調査を行ない、15時と18時のおやつを１回にまとめて給与した結果、摂取量の増加をみた。今年度はその後の追跡調査の結果と、外泊後の体重増加に対する検討、さらに、中学校卒業後の体重の推移について再考したものを報告する。

1. 食餌とおやつの給与調整の追跡調査の結果報告（図1.）破線が昨年度の報告で実線が今年度の追跡調査である。一時的に摂取カロリーの増加がみられたが、６ケ月後には２回給与の時点と同じ摂取カロリーに戻った。なお摂取カロリーは体重１㎏当で障害度別に算出してある。障害度１～４度、５～６度は調整前の摂取カロリーと殆んど等しい値だが、７～８度は調整前より低下の傾向がみられる。１回給与直後の摂取カロリーの増加は、15時のおやつを抜いた事による空腹感を指摘したが、その後食習慣の慣れが空腹感を感じさせなくなった事特に障害度７～８度の摂取量の低下の原因としては、障害進行、さらに運動量の減少が考えられる。
2. 外泊後の体重増加への検討

当院では、夏休み約２週間、冬休み約１週間の外泊を許可しているが、夏休みで外泊者40名中16名に平均 1.7 ㎏、冬休みで10名に平均 1.0 ㎏の体重増加がみられ、ＡＤＬは低下の傾向にあった。（図２）この短期間の体重増加の原因としては、①好みの献立が多い為摂取量が多くなる。②規則・時間などに制約されずに精神的に安息が得られる。③運動量の減少などが考えられる。体重増加のみにＡＤＬの低下の原因を問うことはできないが、生活環境の変化が食餌摂取量、体重増加、ＡＤＬ増加の低下に影響を与えている事がわかる。他に、昨年３月卒業した５名の患者の卒業後の生活の変化と体重の推移は（図3.）の通りで、破線が就学中、実線が卒業後である。当院では中学卒業後は通信制をとっており、就学時に比べ、時間的、精神的にも余裕が生じ、運動量も減少、それに加えておやつは自らの小遣いにより好みのものを摂取できる様になった事がこの様な体重の変化を示したものと考えられる。

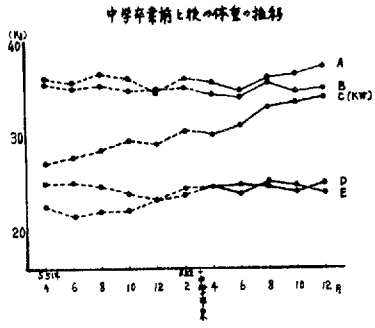
〔考　　察〕

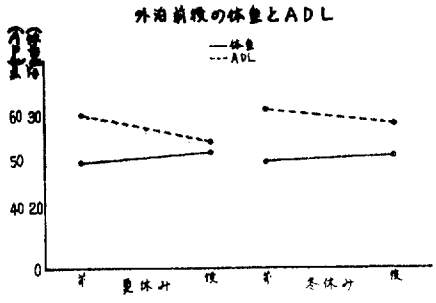
おやつ給与調整により一時的に摂取カロリーの増加をみたが、追跡調査では再び調整前に復し何らかの抑制が加わるものと考えられる。先には空腹感が食習慣の慣れで摂取量が元に復したと

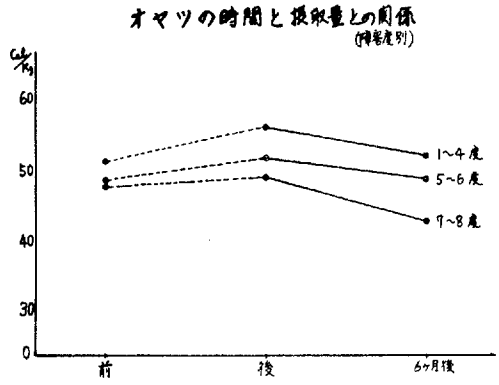
指摘した。その他に体重増加抑制の要因として、入院や就学による規則正しい生活や精神的ストレス、訓練などによる運動負荷、画一化された食餌も考えられる。この事は、先に述べた抑制の要因からある程度解放される条件にある事からも明らかである。

しかし、一方では、外泊によりＡＤＬの低下する例もある事から、ただ単に体重を増加させる事のみが好ましいとは言えない。

以上から推定すると、障害度の低い時点では体重摂取の工夫や食餌内容の工夫、さらに障害が進行し、ＡＤＬが低下した者に対しては、入院、就学などによる規制が摂取量に及ぼす影響を再考するなど、障害度に応じた至適体重、至適カロリーという取り組みを必要とすると考えられる。







3 食餌の全経過におよぼす影響について

国立療養所下志津病院
鵜沢　美智子　　飯田　政雄

幼児期、学童期、思春期等と末期症状時のそれぞれに応じた食事摂取量と体重の変化を考察し食事の内容の再検討をするために７才より19才まで各年令層のものを８名抽出し、昭和50年７月10月、昭和51年７月、10月、昭和52年７月、10月にわたり体重の推移について調べた結果、表 1.

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔はじめに〕

当 PMD 病棟はやせの改善の為に食餌とおやつの関係調査を行ない、15 時と 18 時のおやつを１回にまとめて給与した結果、摂取量の増加をみた。今年度はその後の追跡調査の結果と、外泊後の体重増加に対する検討、さらに、中学校卒業後の体重の推移について再考したものを報告する。